

日本語の基礎について

序 章

朝目覚めて、今日という一日を自分ほどのように過ごすのかを考えている。朝の食事と身支度をすませ、家を出て大学に向かう。道行く途中、燕が数羽巣作りする場所を求めて飛び交う姿を目にする。コーヒショップから漂うコーヒーの匂いが堪らないくらい私の嗅覚から喉元へと「飲みたい」と誘ってくれる。この誘惑から瞬時に離れ、先を急ぐ。桜の花びらがちらほらと散りはじめる街路樹を歩を早めて進む。路面には、真っ白な花吹雪が雲の絨毯のように敷き詰められている。行き交う人の数が次第に増えてきた。ちらほらと顔見知りもいてか、挨拶が交わされている。なかには、親しい者同士の話が快く弾んでいるようだ。この会話にこれから耳を傾けて見ることにしようか……。

日本語の四季

ことばに結実した日本人の四季に対する季節感を過去から近き将来に向かつて紡ぎ続ける現代人とこのことばの源から紡ぎ出してきた古人たちの言語文化遺産を瞻眺しよう。

「春夏秋冬」を「春の日」「夏の日」「秋の日」「冬の日」として随想を巡らすこの国の人々は、これを象徴する歌を口ずさむのである。「春の日の花と輝く」はアイルランド民謡にあり、「あの、夏の日—とんでろじいちゃん—」

は大林宣彦監督の映画作品に。「秋の日の牛、オロンのためいきの身にしみてうら悲し」はポール・ヴェルレーヌ原詩・上田敏訳『海潮音』の「落葉」・堀口大學訳「秋の歌」・金子光晴訳「秋の唄」・窪田般彌訳「秋の歌」に四人の日本人によって日本語に翻譯されている。「冬の日記憶」は中原中也『在りし日の歌』の題名にとことばの記憶が呼び覚まされていく。

季節感と云うことばで表現する人の感覚器官の多くは、頭部に位置する身体部位名「目」「耳」「鼻」そして「肌膚」の繊細な感触であることに気づかされる。

《補遺》

「春の日の花と輝く」http://classic-midi.com/midi_player/uta/uta_harunohino.htm]

「あの、夏の日—とんでろじいちゃん—」<http://www.cinematopics.com/cinema/works/output2.php?oid=451>]

「秋の日の牛、オロンのためいきの身にしみてうら悲し」<http://pinkchiffon.web.infoseek.co.jp/book-automme.htm>]

「冬の日記憶」http://2style.net/misa/fuguruma/tyuya/arisi_y.html]

次に、「古典のうた」ではどうであろう。大岡信『折々のうた』『朝日新聞創刊一〇〇周年企画として始まったのが、一九七九年一月二十五日。古今の詩歌を縦横に取り上げ、足かけ二十九年に及んだ。何度か休載期間をはさみ、最終回である二〇〇七年三月三十一日が六七六二回目。約四六〇〇首を集めた『万葉集』をはるかに上回った』に紹介されたなかから抜粋してみると、

- ひさかたの ひかりのどけき 春の日に しつこころなく 花のちるらむ 紀友則

《補遺》

「二十一世紀を開く扉 ～言葉の探求、美の思索～大岡信フォーラム・on-forum.org」[\[http://om-forum.org/forum/200212/index.html\]](http://om-forum.org/forum/200212/index.html)

「宇宙連詩」[\[http://iss.jaxa.jp/utiliz/renshi/index.html#\]](http://iss.jaxa.jp/utiliz/renshi/index.html#)

未完